

ふるさと霞ヶ浦を中心とした周辺地域の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第115号 (2015年12月)

風に吹かれて (93)

白井啓治

・ひと雨ごとに冬となってその先に春が居て

今年の秋は、何ともメリハリのない秋で、燃えるような紅葉は期待できそうもないな、と嘆いていたが十一月も終盤になってようやく寒さがやって来た。これで冬が迎えられるなどホッとする。

地球規模の温暖化の所為で、子供の頃に体感した四季の移ろいが、カレンダーの中だけの四季になりつつあることに大きな危機感を持つのは私だけではないだろう。

冷酷で鋭利過ぎる冬があつてこそその春は臃であつて、ズリとした移ろいでやつてくる春には、こちらの内面の問題ではあるが臃を愛でる気分にはならない。

何となくズリとした四季の移ろいの所為か、世情も何となくズリズリと底なし沼に引き込まれていくように思えて仕方がない。メリハリのない四季のようにズリズリと人間を失っているのではないだろうかと心配でならない。

まあ、自分にはそう長い人生が残っているわけではないから、等と言いたい気持ちもないわけではないが、蛇の生殺しに破滅へと進んでしまうことだけは避けたいものである。

例年並みの晩秋の冷え込みが漸くやって来た十一月二十九日、ギター文化館で中川果林さんのコンサートをかつて私の下で一緒に仕事をしていたしおみえりこがプロデュースし、ことば座が共催で行った。

果林さんは、牛久生まれ。子供の頃に美浦村の市川紀行兄の主催する劇団宙の会に出演したことがあり、それがきっかけで舞台に立つ喜びを知ったという。実に不思議な繋がりである。

私の石岡に越してきて初めてできた友人、市川紀行兄が中川果林さんとの繋がりを持ち、弟子のしおみえりこと果林さんと繋がり、しおみえりこを介して私と中川果林さんが繋がる。人と人との繋がり、新しい人と人との繋がりを創造していくのは、聞けば当たり前なのであるが、実に奇遇なこととの連続である。

コンサートは、方丈記の朗誦に始まった。中川さんは、現在ドイツを基点に、ヨーロッパで演奏活動を行っているのであるが、日本の古典に興味を持たれ、古事記をモチーフにしての二十五絃箏表現を考えているのだそうだ。

日本の古典文学をモチーフにした表現を志向するとき、海外の地にいることは創造の幅を大きく広げてくれるものと個人的には思っている。

故岡本太郎氏の言葉ではないが、芸術は爆発

だ！にならない、日本文化に流れる因習を打破し、既成を突き破る力を育て、發揮するにはヨーロッパを基点にすることは良い選択肢ではあると思う。若い表現者の感性に触れ、眠りかけていた創作意欲が刺激され、私ももう少し頑張れるかなと勝手な希望を抱けたことは嬉しい限りである。

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、「ふるさと(霞ヶ浦を中心とした周辺地域)の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>

中川さんの冒頭の方丈記の朗誦を聞いたとき、眠りかけていた演出家としての感覚が刺激され、彼女の好ましい幼さをみてしまった。感じた幼さは、未熟という意味ではない。年輪という意味である。

彼女の好ましい幼さをもっと生かすには、いや大切に考えるならば、もし自分がこのコンサートを演出していたら、方丈記の朗誦を、発心集の序に脚色したかもしれない。

『ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世の中にある、人と栖と、またかくのごとし：』ではなく

『心の師とは成るとも、心を師とする事なかれ。(中略) 人信ぜよともあらねば、必ずしも、たしかなる跡を尋ねず。道のほとりのあだことの中に、我が一念の発心を楽しむばかりにや、と云へり』

の方が、方丈記が何を意図するかは別にして、抹香臭さが、好ましい幼さを引き上げることになるかもしれないな、と思ってしまった。

しかしこれは、あくまでも私の内面に閃いた心象でしかない。

改めて思うのであるが、ギター文化館の空間というのは、実に表現者の琴線をふるわせてくれる所なのかと、この地にあることの意義の大きさに感謝するばかりである。

歴史の里には芸術を発信する基地がなければ文化の里に昇華することはできないと個人的には思っている。ギター文化館という名称に既成の枠をはめて見るのではなく、ふるさとの芸術文化を発

信する基地であるとの認識を新たに持つてもらいたいものだと思つてやまない。

ふるさと風の会、ことば座は今年も大変お世話になりました。

インドに期待

菅原茂美

これまで世界中が、中国に強い関心を向けていたが、最近、経済に「翳り」が見えてきたので、今度はインドが、世界の注目を浴びている。

中国は、人口がベラボウに多く、人件費が安いので、工場での大量生産にもってこいであった。

そして国民の経済力が増せば、市場として非常に魅力的である。それに、共産党独裁の国ではあるが、資本主義を容認しているので、富裕層も増え、車や高級品の需要もあり、海外に出て「爆買い」なども行われている。日本など、その観光客の取り込みに懸命である。

中国経済は急成長し、世界の至る所「メイドインチャイナ」が占拠し、貿易黒字を膨らまし、巨大化していった。世界の工場から世界の市場へと急発展し、富を蓄えていった。そして2010年、日本を抜いて世界第2位のGDP(国民総生産)のし上がり、蛇が象を呑み込むように、世界の巨大企業を次々買収していった。

しかし、超急速な発展は、内部に多くの問題を抱え込んだ。CO₂排出量世界一。言論統制。三権分立せず人権問題多発(1979年以来の一人っ子政策は廃止決定)。政府高官の汚職、知的財産の盗用、サイバー攻撃、南京事件文書を世界記憶遺産に登録、

漢民族と少数民族の対立。異常な海洋進出、領土拡張画策、貧民層(年収4.3万円以下)7千万人(実質2億人とも)対策、相次ぐ爆発事故等数えきれないほど、問題が勃発している。

しかも日本は、核燃料廃棄物のプルトニウムが増えて困っているのを攻撃材料にし、核兵器製造を狙っていると世界に逆宣伝している。これほどまでに日本をこきおろしては下品で見苦しい。粗(あら)拾いは米屋の番頭に任せておけ…。これでは安心して仲良くしていく気が萎えてくる。

現在アフリカ象は50万頭。この3年間で10万頭密猟。その主因は中国富裕層による象牙需要増。それに応えるため、密猟組織は巧妙化。あと10年でアフリカ象は絶滅の可能性あり。

ちよいとそこらをウロウロしていれば、スパイ容疑で逮捕されたり、政府が煽る反日運動で、自動車や商店が焼かれたり、25回も戦争の「謝罪」をしてもなお、重ねて謝罪を要求してくる。安倍総理の戦後70年談話じゃないが、日本人のほとんどが戦後生まれだ。その次世代に戦争の謝罪を尚も続けさせるのは、あまりにも酷ではないのか。いつまで先祖の罪を、子や孫が、永遠に謝り続けなければならないのか。

*

多国の悪口ばかり言つて、ならば日本はどうなんだ? と、必ず反発されるに違いない。

日本の治安と衛生の良さ、それに風光明媚、多様な食文化。長寿。精巧な物造りなど正に世界一と私は信じている。私は多くの国を見たわけではないが、先進国だろうが、まして発展途上国など、治安と衛生に関しては、到底日本にはかなわない。財布を落としても、警察に届いているなんて正

に奇跡。私の家族は北海道で25万円入ったバッグを迂闊にもレンタカーの屋根に載せ、発車。しばらく走り、紛失に気が付き発車現場に戻ったが、勿論何も残っていない。やむなく、警察へ飛び込んだら、なんとわずか30分の出来事であったが、財布はしっかりとそのまま警察に届いていた。これぞ、世界に誇る日本の倫理観と言えよう。

交通違反など、途上国の警察官は大変大袈裟に取り締まるが、袖の下を要求し、出せば後はOK。何知らぬ顔をしている。日本では銃刀法取り締まりは厳しく、殺人など発生率は極めて少ない。

私が中米のある国の居酒屋に入ったら、壁に傷がある。『これどうしたの?』と聞いたら、この間、客同士が喧嘩になり、拳銃の打ち合いをやったんだ。とか。今でも、西部劇時代そのままである。日本では「金や恋」の恨みの刃傷沙汰や、コンビニ強盗などよくあるが、最近、にせ電話詐欺など、卑劣極まりない犯罪が多発している。しかし、自爆テロ、銃乱射、誘拐事件など凶悪犯罪はめったに発生しない。

また、衛生面では、教育の普及により、国民の意識は高く、感染症などかなり発生は少ない。身の周りは、極めて清潔が維持されている。更に、国民皆保険システムは安信である。その結果として世界一の長寿国である。何といっても、日本は世界でも稀に見る治安・衛生の優れた国と言える。そうは言え、最近特に気に障るのは、大企業の大不祥事である。日本を代表する世界でも指折りの大企業が、次々とオジギ草の連発。見苦しい限りである。いずれも「金」にまつわる超ケチが原因。物造り日本も黄昏してきたか?

天下の「東芝」の粉飾決算。旭化成下請けのマ

ンション杭打ち偽装事件。データを改竄して検査をごまかす。マンションが傾いたり、手すりに段差ができたのは、大震災の影響などと当初弁解していたが、偽装を認め、建て替えて弁償する事になった。すぐバレるような猿智慧をなぜ働かすのか? 更にまた一流企業の「東洋ゴム」はビル・船舶・電車等の耐震ゴムが、品質基準に満たないものを使用。世間を騒がしている。

このようなごまかしは、白い胡麻を黒く染め、黒胡麻として3倍の値で売る中国の巷間の小事件と、同レベルと言われても仕方あるまい。

その他、功名に焦る医師の医療事故、マイナンバーに関連した高級官僚の贈賄事件、オリンピッククエンブレムのデザイン盗用、新国立競技場建設にかかる、無責任な一部始終。数え上げたらきりが無い。中国を非難するどころの話ではない。しっかり襟を正して、折角ノーベル賞受賞やラグビー(W杯)で好成績に沸いた国民の喜びを、吹き飛ばすような愚劣な行為は、金輪際慎んでもらいたい。新規巻きなおしで、物造り日本の名誉とプライドをしっかりと取り戻せ!

【尤も日本と並び、先進工業国ドイツのVWが排気ガス規制を逃れる不正を起こし、1100万台のリコール。制裁金、罰金、株主訴訟など併せて10兆円の損失という。巨大企業ほど優秀なスタッフが揃っていると思うが、なんたる愚行。しかし、VWは、自分だけの損失であるが、アメリカの、2008年の「リーマンショック」は、全世界に、大恐慌を巻き起こした。こんな甚だしい迷惑は、二度と起こしてもらいたくない。】

*

以上諸々の背景があり、次の時代は「インド」

が注目。(日本と印度は深い関係あり。中国の唐代、玄奘三蔵が天竺にわたり、645年に、657部の經典を持ち帰り、大般若経などに翻訳。それを更に日本の僧侶が持ち帰り、日本にも仏教が伝来。)

さてインドの政治経済などに触れる前に、ユーラシア大陸の南にあつて「インド半島」、「インド亜大陸」などと言われる、その国土の立地経過を辿つてみたい。国土の成り立ちが、その後の国の文化・経済などに大きく影響するからである。

ウェーゲナーの大陸移動説(*1)によると、約3億年前、地球上の陸地は「パンゲア」と呼ばれるただ一つの巨大な陸地の塊であった。その塊の北半分は、「ローラシア」、南半分は「ゴンドワナ」と呼ばれた。それぞれは分離し、更にそれぞれの内部で細かに分裂して、ひび割れた隙間に海が侵入し、今日見られる世界地図が形成されたと言われる。その証拠は例えば、アフリカ西海岸線と南米東海岸線は、パズルのピースのようにピッタリ。遠く離れていながら生物はとても似ている(海を越える事のできないミミズの遺伝子が、両大陸でそっくり)。離れた陸地の岩石なのに、磁石の向きが一致するなどである。

(*1)ウェーゲナーは大陸が移動する原動力を、地球が自転するその遠心力とみなしたが、後の地球物理学は、地球自転遠心力に大陸を移動させるほどのベクトルは無いと結論付けた。そこで1928年アーサー・ホームズは、大陸が移動する原動力を「マントル対流説」で説明した。これは腕の中の熱い液体は中央で下から湧き上がり、辺円部では冷やされて下に沈んでいくように、マントルも対流を起こし、その上に乗っている「地殻プレート」は水平移動すると唱えた。1960年

にロバート・デイツは更に海底からマントルが湧き出ると、そこから両脇に次々マントルが供給されて広がり、冷えて海底が広がる「海底拡大説」を唱えた。そして究極ツゾー・ウイルソンは1968年、湧き出たマントルは、プレートに乗せて地球表面を水平に漂移し、いずこかのプレートと衝突し、互いの重い方の地殻が下に沈むとする「プレートテクトニクス」理論を発表した。こうしてマントルに乗った地殻は、何億年の間に、離合集散を繰り返す。現在の地球表面の世界地図は、かりそめの姿と言われる。

さてその Gondwana 大陸には、今日の南極・南米・オセアニア・アフリカ・マダガスカル・アラビア半島などが含まれていた。ところが実はインドも南極などどくっついていたのである。それが分離し、インド洋を北上し、流れ流れてついにはユーラシア大陸南部に4500万年ほど前、ドシンと衝突したのである。インド洋プレートは重かったのでユーラシアプレートの下に潜り込み、陸地側は造山活動でヒマラヤ山脈やチベット高原が出来、その頂上部には貝殻が存在する。

このようなプレートの衝突は、至る所で見られ、ニュージールランド南島や台湾は、押し上げられ、台地が形成され、現在成長中である。日本では、伊豆半島が沖合から流れてきて静岡県に衝突、突きあげられて「丹沢山地」ができた。

*

【ある夜の夢】…日本列島南海のいずこかの海底火山が噴火し、溶岩流で島が拡大し、佐渡島くらいに成長(仮名X島)。一方、ハワイ諸島は移動しながら圧縮して一つの大きな島となり、流れ流れて茨城県沖10kmまで近づくと、アメリカ政府は、対

アジア政策の拠点とするため、X島とハワイ島の交換を申し出てきた。日本政府は、直ちにOK。漂流ハワイ島を(道州制導入により)「北関東州」に帰属させ「茨城区ハワイ市」という事になった。なお太平洋プレートの圧迫により、現在の岩間あたりの一つの山が活火山となり、大噴火を続け、巨大化して、富士山を凌ぐ4000mほどの見事な霊峰となる。首都はその霊峰の麓に移転。現石岡市・小美玉市・笠間市・茨城町などが合併し「パラダイス市」という首都になる。その頃、交通機

関は、茨城空港が巨大化。現東京から、仙台まで、新幹線などという古いものではなく、「超幹線」となる。「常磐超幹線」は、直径50メートルの真空のパイプの中を、上段はリニア、下段は完全自動運転の電気自動車が走る。パイプは真空なので、空気抵抗も騒音もない。リニア線は複々線で、時速1000km。すべての列車は始発から到着まで、ノンストップで走る。しかし各駅の乗降客は全て対応できる。そのシステムは、走行列車の一番後ろの車両にその駅で降りたい人は移動し、列車が駅に近づくと最後尾の車両は切り離され、その駅に静かに滑り込み停車する。その駅から走行中の列車に乗りたい人は、予めその駅に停車中の車両に乗り込んでおり、走行列車が近づくと本線に出て走行し、後ろからドッキングされるのを待って走行を続ける。この繰り返しでノンストップでありながらすべての駅で乗降できる。自動車道は片側4車線で、自動運転の通常速度は時速300km。一方、日本海は、太平洋プレートの圧迫により縮小し、九州と朝鮮半島は繋がる。日本列島は日本海側が膨らみ面積を増し、世界の人口が高く、移民を多く受け入れ、日本人口は2億人ほど。】

これは夢物語ではない。かなりの確率で有りうる話。私は後藤新平の親戚ではないが、すぐ近くで生まれた。夢を見るのは真に楽しい。

*

さて長々とインドに関係ないような事をなぜ書き続けたか? それはチベットに源流を持つインダス川は、BC2300年頃「インダス文明」を生み出し、中国古代文明(殷王朝(BC1700)より古い。インダス文明は世界4大文明の一つであり、いずこの文明も大河の畔に栄えた(マヤ・インカ文明には大河はない)。インダス文明には多くの遺跡が残っており、水道、文字、高度な工芸品など繁栄を極めた。しかしBC2000年頃から生態系が変わり、大陸移動の関係で土地の異常起伏があり、インダス川は氾濫を繰り返す。洪水や流路変更により人々は村落を捨てる。BC1700年頃には急激に活力を失い、戦乱に明け暮れるメソポタミア文明との交流が途絶えた事も衰退に拍車をかけた。大河は長い年月のうちには何度も氾濫を起こし、肥沃な平野をつくる。土地が肥えれば農作物の収量が増え多くの人口を養う事ができる。しかし人口が増えれば住宅や構築物の他、薪炭にするため周囲の森林が切り倒され、保水力をなくし、いずれの文明も滅びていく。多くの文明が滅びた遠因は水源枯渇である。インドも度重なるインダス川の氾濫などで、土地が肥沃になり、人口は増えたが、川を治める事ができず、今日、発展途上国にとどまっている。国土の立地条件は後々の国の発展に大きな影響を与える。

*

さてインドが期待される理由は、何といつても人口が多い。現在12億人と言われるが、一人っ子

政策の中国を抜いて、2050年頃は世界一の人口を抱える国となる。すると、その人口は、安い賃金で工場生産が大規模化できる。しかも民主主義の国なので、資本主義が浸透しやすい。国民が豊かになれば中国が辿ったと同様、富裕層が増加し、魅力ある巨大市場となる。人種はコーカソイド、オーストラロイド、モンゴロイドの併存混交である。宗教はヒンドウ教82%、イスラム教12%、キリスト教2%。仏教は0.7%などである。

それに加えインドは、元イギリス領(1858年)であつたため国民の多くが英語を話せる。イギリス領から独立(1947)するとき、ヒンズー教の多くの国民はインドにとどまり。イスラム教を信じた人々はパキスタンに分かれた。しかしそれぞれに少数、逆境の人々もおおり、しばしばテロなど反乱も勃発している。そして、インド・パキスタンはカシミヤをめぐる領有権が対立し、紛争が絶えず、互いに核保有国となり、未だに睨みあつている。

さてインドでは、憲法で21の言語が認められているが、公用語はヒンディー語である。しかし、共通語は英語という事になる。インド人は数学に強く、コンピュータのソフト開発など非常に優れた技能を持つ。それに英語に強ければ鬼に金棒である。インドは独立時、「カースト」制度は憲法で禁止された。しかし、いまだに厳然として習慣は存在し、輪廻転生を信じている。生まれ代わつてもこのカーストは変わらず、低階層の人々にとって、真に苦痛の種であるが、能力次第で、IT技術を駆使すれば、カーストに関係なく、高収入が得られる。これは国民にとって真に大きな希望である。このような事情から、今やインドはブリ

ックス(ブラジル・ロシア・インド・中国)の中で最も工業開発など、発展の可能性を秘めた希望の国と言える。狡猾極まりない中国を捨て、産業界は、早々にインドへ方向転換すべきと思うが、いかがなものであろうか。

地域に眠る埋もれた歴史(9)

真壁地区(3)

木村進

○ 羽鳥天神塚古墳

真壁の散策で古代を考える上でどうしても一度行ってみたかった場所がこの羽鳥天神塚古墳です。桃山中学校の通りの反対側(山側)だと調べていたので、羽鳥地区にいけば場所はわかるだろうと考えていたのですが、それらしきものはありません。そしてまた出直しました。

まあ、時間のロスは多いですが、新たな発見も逆が増えます。間違つて知らない道を何度もウロウロすると見えなかつたものが見えてくることもあります。

この羽鳥天神塚古墳は上に一本の大きな木があり、小さな祠があるだけの比較的小さな円墳です。筑波山がバックに綺麗に見える場所です。周りは夏草が覆い、道がよくわからなくらいでした。古墳の麓によく読み取れないくらいになった「羽鳥天神塚古墳」の文字が書かれた木のポールがたっています。上に小さな祠が置かれているだけです。

なぜこんな変哲もない藪の中の古墳に行つてみたいと思つたのかというと、ここに「菅原道真公

のお墓」があつたと言われているからなのです。菅原道真を知らない人は少ないと思いますが、九州太宰府に流されその地で亡くなりますが、死後いろいろの天変地異がこの菅原道真の起こしたことだと噂が流れます。

そのため、朝廷は崇を恐れて天満宮に祀り、学問の神様として多くの方に親しまれるようになりました。ではなぜこのように離れた地に墓があつたと言われるのでしょうか？

一般には道真は奈良市菅原町近くで生まれ、太宰府にて59歳で亡くなり太宰府の地に葬られたと言われています。では少しだけこの真壁との関わりを調べた範囲で紹介します。

平将門は太宰府で道真が死んだ903年に生まれたと言われます。このため、将門には道真の生まれ変わりであるとの噂がついてまわります。平家の祖は平国香であるとして、石岡でも大塚氏の祖先を国香としています。この国香の弟には「良将」「良持」「良兼」「良文」「良正」がおります。この「良持(良将)」の子供が将門です。この将門の父「良持」が茨城県豊田郡(旧石下町)近くで館を構えていました。

一方菅原道真の三男の菅原景行(かげつら)も駿河に左遷されていたのですが、放免になり、その後常陸介として常陸にやってきて良持を頼つたと言われています。そして、この良持の館に近いこの真壁の羽鳥地区に館を建てたのです。将門との関係ですが、学問の神とも言われる道真の子である菅原景行もやはりその才能は優れたものでした。

将門はこの景行を師と仰いで、学問を習つたとも伝わりませんが、この年代の人たちの生まれも諸説あり、お互いに交流があつたのかも定かではありません。

ません。

延長4年(926年)に景行は将門の叔父・良兼の力を借りてこの羽鳥の地に「菅原天満宮」を建て、この羽鳥天神塚古墳に道真の遺骨を埋葬したのです。そして、これが全国の天満宮の最初とされています。

しかしながら、この天満宮はそのわずか3年後の延長7年2月25日に常総市(旧水海道市)大生郷に移転しました。(大生天満宮)

将門が都から下総国に戻ったのは延長8年(930年)であり、この地の天満宮が大生に移ったのはその前の年になるのです。それを考えるとどのよ

うな接点があったのかは疑問が残ります。また、景行の生まれが867年とされていますが、下総守と常陸介と合わせた在任期間は24年間とされるようです。しかし、詳しくはわかりません。後からいろいろ尾ヒレがついてきても不思議ではありません。この大生郷の天満宮にこの記録が残されているそうです。

大生天満宮は太宰府天満宮、北野天満宮とともに日本三天神といわれており、この3箇所天道真の遺骨があるとされています。

この古墳は道真の三男の景行が926年に道真の遺骨を埋めたとされているのです。

遺骨は3年後の神社の移転に合わせて移したというところですが、真相は定かではありません。やはり、国府のあった石岡から筑波山の反対側に来ると見える景色がずいぶん違います。出てくる人物も違って、面白いです。

常総市の大生郷天満宮のある場所は、昔「菅原村」と言われていました。この神社も「菅原神社」と呼ばれていました。その後、水海道市になり、

今は常総市です。

○ 羽鳥地区

菅原道真の遺骨の一部を一時的に埋めていたとされる真壁の羽鳥天神塚古墳を紹介しましたが、この場所が分からずに近くをウロウロしておりましたが、その時の様子を記しておきます。

羽鳥地区は、真壁の旧町並みから前に紹介した筑波四面薬師の一つである薬王院のある椎尾地区と真壁の街を真つすぐに結ぶ通り沿いにあります。街の中心地からも二目くらいの場所ですが、周りのはのかな田んぼが多くあります。

まず見つけたのはサイクリングロードです。

これは土浦から筑波を経由して岩瀬までを結んでいた筑波鉄道筑波線が28年前に廃線になった跡を自転車道路にしたものです。

この鉄道と自動車道の交差する昔の踏切場所には線路がまだ埋め込まれたままになっていました。ここは真壁駅の一つ手前の「常陸桃山駅」があった場所に近いようです。

この鉄道は28年ほど前に廃止されてしまいましたが、真壁駅を街の中心部に造ることができず、この場所から街の北側の古城に寄ったところに駅ができました。このため、鉄道線路はこの桃山駅から右手(東側)に回り込むように曲がっていました。この道もきれいに整備されており、地元の人々の散歩道にも良いようです。

すぐ近くに「桃山中学校」がありました。こちら側から見る筑波山は石岡の方から見る姿とはまるで違います。

ウロウロするうちにこの桃山中学校の西側の裏に小さな古墳がありました。「吾妻塚古墳」と書か

れていました。大きさは羽鳥天神塚古墳より少し小さいでしょうか。円墳 径約20 m 6世紀後半の築造となっていました。

○ 旧筑波線真壁駅

常磐線の土浦駅と水戸線の岩瀬駅間の400mを結んでいた筑波鉄道筑波線が廃線になったのはもう28年も前です。

その頃、それほど興味もなく、仕事が忙しくて乗らなかつたが、このジーゼル車両が走っている姿は何度も見ていた。今から見ると懐かし、鉄道も残しておけばよかったのと思うのだが、まあどうしようもない。

ここ石岡から見ると「鹿島鉄道」がこの筑波線(当時の常総筑波鉄道)と合併して関東鉄道となったのが、昭和40年のことだが、この筑波線がいち早く廃線となってしまった。

(鹿島鉄道の廃線は2007年春なので、この筑波線の廃止はその20年前になる)

真壁駅は桜川市真壁町古城(昔の真壁城のあった場所に近い)に造られていた。

この筑波線の廃線後すぐにこの鉄道の跡地をサイクリングロードとすることが決まり、つくばリソリンロード建設が始まった。

この頃はまだそれほど自転車ブームもなく出来てもあまり走る人もいない状態だったように思うが、最近はこのサイクリングロードを走っている自転車も多く見られるようになった。

今はまだ、土浦筑波間は比較的用户が多いようだが、真壁や岩瀬方面の利用者が少し少ないように思う。しかし、この真壁も魅力があるし、加波山や雨引観音(薬法寺)などを組み合わせれば多

くの魅力を感じさせてくれる地域である。旧真壁駅は昔のまま残されている。「思い出の樹」と名付けられた桜の並木がありました。

この樹は大正5年、真壁駅の北島駅長が駅のホームに10本の桜の木を植えたそうです。そして、そのうち3本の桜が今でも残り、鉄道の駅として70年、自転車ロードの休憩所として28年間この場所を見守ってきたのです。

駅のホームの先が公園風になっていて、そこに「茨城百景」の碑が置かれています。「伝正寺と真壁城址」となっていますが、昭和25年に制定された時の正式登録名は「伝正寺と加波足尾」です。

○ 奉安殿

出島を散策して見かけた「奉安殿」が真壁にも残っていた。奉安殿は昔の真壁駅の駅前横通り沿いの美容院入口に置かれていた。

この奉安殿は、敗戦までは昔の真壁小学校の入口に置かれていたという。戦争中までは、どここの小学校にもあったようだ。それを戦後、GHQによりすべて取り壊し命令があり、ほとんどが取り壊され、中に置かれていた天皇・皇后の写真や教育勅語は全て廃棄や没収となった。

戦時中に小学生だった方はご存知であろう。

大概是学校の入り口近くに有り、朝晩校門を出入りするたびに、敬礼したという。

この真壁小学校の奉安殿は、壊さずにそっと移築したもの。しかし、当時の状況を考えるとこれを壊さずに隠したのもわからないではない。

この地域までは見るも目が届かなかったのだらう。この奉安殿の中には昔の写真や勅語が置かれている。

建物そのものはギリシヤ風の建築様式だ。石岡小学校にもこの奉安殿はあったそうだ。

今は、その場所(旧府中城の土塁の一部?の高台)には「常陸のみやこ 一千有余年之地」の碑が置かれている。(続く)

探しものは

伊東弓子

初夏の頃であった。石岡で手にしたチラシに胸が高鳴る思いだった。チラシの半分に陸平貝塚遠望と題した絵があった。一番奥に行方の台、出島の半島も遠く、馬掛、大山、端山は中間にしつかり存在し、手前に古渡の地が描かれているものだった。そこには御留川以前の四十八津という漁業自主組織の中でおおらかに生きていた人々の姿が見える。

時が変わって御留川制度の中で他領の望人(入札希望者)を募るために、他領には川守宅から古渡へ西廻の入札回状を届け、東廻の回状は浮島へ届けた所である。それぞれ四〜五日の間に川守宅へ差出すという早さで三ヶ年の請負希望者が決まる制度があり、その舞台となった場所だった。

このチラシが是非来てください、と私に言っているようだった。

そこに「古渡へ行ってみませんか」の声がかかった。これは逃す訳にはいかない。チャンスだと気分はよかったが、新しい会へ入るには躊躇いがあつた。もうこれ以上仕事を作らないという自分への約束があつたから今回は遠慮した。

控えめにお断りした筈なのに、何がそうさせる

のか当日出かける用意をしていた。絵図の上で見ただ遠い距離も、自分に言い聞かせた約束も何のその、何が何でも行かなければと電車に乗り、バスに乗り換えていった。

内浦が小野川と形を変え、堤防で固められた土手に添って街並みがある。上流の方から、たった一ヶ所の河岸近く迄行ってみた。集まっている人、舟への乗り降りが見える所で眺めていた。川岸屋という河岸の漁師さんが、網をかけておいてくれるそうだ。それを月に一度集まって量、種類等記録していくと聞いた。捕った魚はその場で料理して、戴くそうだ。希望者には持ち帰りもよいとのことだった。私は漁村の当時からあつたと思われる道を町通りに行った。河岸から沢山の魚が上がった賑わいは見る影もない。商店で栄えた看板も色褪せている。辛うじて店を開けているのは何軒もない。道は南に北に西へと行く通路と化している。どこの町にも見られる同じ姿だった。両町並が三十五、六軒続いている中に延命地藏尊・札札所から以前暮らしていた人々の生活が忍ばれる。茨城百景「古渡の湖畔」の碑が、四季折々の豊かな自然と歴史を伝えているようだった。

ふうーっと私の前を歩く人影を見た。急ぎ足で歩いている。周囲に目をやり、立ち止まって悲愴な表情で溜息をついている。一軒一軒声をかけ、人捜しをしているようだ。

まもなく寺の門が見えた。さっきの女の人が境内に入ってしまった。草鞋履きで衣類も大部汚れていた。自分は水戸藩の高崎村から来た者だと言っている様子だ。夫がこの寺に担ぎこまれてこなかったかと聞いていたようだ。住職との話から事情が分かってきた。夫は玉里御留川の川守役をして

いる家の使用人であつて、この女の人はその妻のようだ。三年に一度の望人を募る為の入札廻状をもつて古渡へ来たが、家に帰つてこないという。

普通なら六日目には必ず戻つたものだが、今回は一ヶ月経つても戻らず、川守宅へ問い合わせると予定通り六日目には家に帰したという返事だつた。下玉里村、高崎村を捜しても分ならず三ヶ月も過ぎ、老いた親の心配も重なるし捜しにやつて来たとのことだつた。

以前から、短時間で入札廻状を届け歩く役の家族や役目を果たす男の姿、天候との戦い、四季の海、そこに住む人の生きづかいなどを物語にした思いがあつた。今回止むに止まれずやつて来たのは、この女の人に合つたのだと確信した。

そうだ次回は、女の人が歩いて古渡まで行ったことを思つて私も歩いてみようと思ひし新たな仕事を心の中で増やしていた。

庭掃きをしている住職と奥さんに合つて、四十八津のこと、玉里御留川のこと、玉里と古渡のつながりなどを話して別れた。

会の人の話によると、今回は鰻が一匹捕れ、それを焼いてほんの一口づつ食べたそうさ。

七月は木原までバスで行つた。暑い道を歩くことになるので雑貨屋によつて麦藁帽子を買い、道を探ねた。木原は想像していた田舎道とは違い商店が続く、町並にも活気を感じた。土浦から続いていた田園風景と違つて坂を登つて行く道沿いに賑わう町並みが現代通りなのだろう。

大屋敷を曲がつていくという道が漁を中心にした時代の道だと確信して歩き出した。道案内の看板もなく、田園に立つ人の姿も無い。当てになるのは石佛や道しるべ、電柱に刻まれた地名、社や

寺だ。

安中地区大師講、大須賀津村（三体の石佛からこの辺の地名がわかつた。草取りをしていた男のと言葉を交わした。定年後野菜作りを始めたとのこと）、黒坂命古墳、電柱に山内支³⁸とある。美浦村山内と記されている。大きな家が多いのは驚いた。

電柱に牛込の字がある。美浦村牛込とあり、正一位稻荷神社牛込根本一同二十年四月吉日とある。旧道から畔をいき、120号へ。そしてまた旧道へ出たところでご夫婦と話す。

「大山まで三〜四キロかかるよ。お爺さんが子供の頃、学校へも行かず雑魚、海老、鰻、鮎、鯉、公魚取りをした」という。

標識に八井田とあり、出島の歩崎が遠くに見える。先の方で水上スキーの音がする。

支柱に新田とある。田草刈をしている人に聞いたがわからないという。地元じゃないのだとのこと。角に大山新田とあつた。施主「廣田五郎」の碑があつた。

余郷を出ると目の前に広く田が続く、うんざりしてくる。どこまでも田、田、田。堤防すれすれの流れがある。早苗橋とある。足が痛みだす。三人の男が農道にいたがどこか知らないという。稲作りも地元の人じゃないのかと不信の気も加わつて何してたのかと疑いをもつて見てやつた。

「ああ水が飲みたい」

電柱に佐倉とあるがどういふことだろう。角に弘法大師の堂があり、近くに稲荷もあつた。堂の前で手を合せている女の人の姿を見た。暑い陽射しの中、ただ只管に歩いているその人。私も暑い暑いと歩き続ける。

どこで間違えたのか信田古渡の方へ来ていた。小学校の近くのお婆さんと話をした。千代田村から嫁に来たと話していた。今迄歩いて来た途中、本当に人に合ふことは少なかった。どこの地域でも感じるのと同じだ。

天満宮。奥の方に祠がある。

セブンイレブンの後に交通安全ホーイホーイ地蔵があつた。佐倉河岸の斜めの坂を登つた。大部遠回りした。地図も持たず昔の人の感覚で歩いて来たのだから現代人ならではの苦痛がともなつた訳だ。停留所のベンチにどつかと腰をおろした。

古渡に着いたのは四時十分だった。木原で九時半にバスを降りてから六時間四十分もかかつた。よく頑張つたと思うが、あの女の人は、しようやの家を探ね尋ねた訳だから、もっと難儀なことだつたらうと思ふ。

あつたかいお茶に舌つづみして帰りのバスの中では眠り続けていた。

会の人の話によると、参加者多く大人、子供沢山いて四舟（四回）出してくれたそうさ。ごろが沢山捕れた。鰻も大量六匹捕れたが、一人の男が自分の袋に入れてしまつて、みんな文句を言つていたという。そういうの許しておいていいのだからか。舟の上にぼらが飛び上がつてきて大騒ぎしていたと聞く。ごろは塩で洗つて酔につけて食べたそうさ。

九月は、こうもりで左顎をついて怪我をしたので行かずじまいとなる。会の人によると海老と玉ねぎのかき揚げがうまくて沢山食べたとおいしかつた余韻の残る報告があつた。

あの女の人はどこをあるいていたろうか。

八月、十月、十一月と出かけていったが長くな

るのでここで終わりにしようと思うが、尻切れト
ンボのようになってしまった。

会の人に月に一度、捕れた魚のことを聞くのも
現在の霞ヶ浦の一部の現状と違って受け止めて続
けていこう。

体力を使い果たしている自分と心をどこかに置
いてきてしまった自分に気がついた。現実と過去
の妄想の中を行ったり来たりしたせい、眉毛が
なくなってしまった。髪がよくよく薄くなってし
まった自分の姿に気がついた。うらしま太郎なら
ぬうらしま花子になってしまった。霜月もまもな
く終わる。

あの女の人はずっと若いままだろうか。

県指定文化財(9)

兼平智恵子

茨城県文化財保護条例の規定により、茨城県と
して重要で価値の高いものと認められ茨城県教育
委員会教育長の指定する石岡の県指定文化財をご
紹介しております。

今回は、土橋町の獅子頭ですが、当会報96号(2
014)、五月号で「土橋の大獅子」としてご紹介
してありますので、重複する箇所があります事
をご了承下さい。

○土橋町の獅子頭

有形民俗

平成四・一・二四

石岡市教育委員会発行「石岡市の文化財」によ
りますと、…常陸総社宮例大祭において露払いを
行う獅子である。材料は、保存に適した檜材を用

いており、重量は約十七キログラムもある(正面五九センチ、
最大高五六センチ)。獅子頭の髪は馬の毛を使用してい
る。上塗りには、本漆(朱、黒)を中心にし、口歯は
金箔、金泥、口耳などは動くようになってい
る。製作年代はわからないが、口語伝承では、宝暦年
間(1715~1764)頃、当時、土橋町で世話をし
ていた渡大工某が町内の照光寺の本堂を修理した
際、板戸に描かれていた唐獅子を下地に三年間を
費やして獅子頭を完成させ、町内を離れるにあた
ってお世話になったお札にと置いていったと言わ
れている…

獅子舞には一人で舞うものと、二人が一つの獅
子頭中に入る舞があり、この二人舞いは「昇殿の
舞」と言い、神輿の露払いを務めている土橋町の
獅子のみに保存、継承されている舞の一つで、石
岡の幌獅子の源流であり、石岡のおまつりを代表
するシンボリック的存在とも言えるそうです。

力強く巻きあがった太い眉と黒い鼻が特徴で真
正面から見ると左右対称ではなく、目と眉とが微
妙にずれて、奥行きのある表情を醸し出している
そうです。

こうした歴史をもつ、通称「土橋の獅子」は、
昭和五十八年石岡市指定有形文化財に指定され、
平成四年一月には、茨城県指定有形民俗文化財に
指定されました。

来年のおまつりには是非、奥行きのある表情を
醸し出す、土橋の獅子をじっくりと鑑賞してみたい
と思います。皆さんもどうぞお楽しみ下さい。

今年も早や、十二回の原稿提出が無事終了しま
した。これも続けてご愛読頂いている皆様のご支
援とご助言の賜物と厚く御礼申し上げます。私に
とりましては、大きな大きな励みとなっております

す。

それに、大変嬉しいことに、京都の今井様から
のご寄稿です。今井様は、国府巡りをなさって
いて、昨年の九月に石岡を奥様と訪れて下さいまし
た。それ以後、石岡に思いを寄せて頂き、「京そし
て大和」からの風を常陸国へと送り届けて下さっ
ています。大和の国、京の都と常陸国とのつなが
りが興味深くとても楽しみになっております。

又、栃木の赤井様からは「都都逸一代」のカラ
オケテープを送って下さいました。

初代都々逸扇歌は文化元年(1804)常陸太田
市に生まれ江戸末期に都々逸節を広めました。洒
脱な風刺を三味線にのせ美声をもって唄い、その
中でも「上は金、下は杭なし吾妻橋」の狂句で幕
府の怒りを買ひ、江戸払いとなり、姉の嫁ぎ先の
府中(現石岡市)で生涯を終えました。その扇歌の
生涯が唄われています。いつの日かカラオケで歌
ってみたいと夢んでいます。

どうぞ皆様お元気でご越年なされますようお祈
りいたしております。

・葉を落し冬支度 府中城跡の古木 智恵子

平沢官衙遺跡

小林幸枝

先日、つくば市の平沢官衙遺跡に行ってきました
た。平沢官衙は、奈良から平安時代に造られた常
陸国筑波郡の郡衙跡で、国の史跡になっています。

郡衙には、郡衙政庁、正倉、館、厨などの建物
があり、平沢郡衙跡はこの中の正倉部分と言われ

ています。この史跡では、堀立柱建物跡、礎石建物基壇跡、大溝跡、柵列跡、竪穴住居跡が発掘されています。

遺跡跡地には、高床土壁塗双倉、高床校倉、高床板倉、大溝跡などが実物大で復元され、歴史公園として一般に公開されています。

ここでは毎年11月には「つくば物語」と題してオカリナコンサートを中心としたイベントが開催されています。

広々とした眺めのいい公園で、私も機会があれば、こうした広々とした景色の中でおおらかな平安の文化を想いながら舞を舞ってみたいなと思いました。

【風の談話室】

2015年も残りわずかになった。世の中、妙に不穏な気配が漂うが、当分の間は風の会には、大きな波風もなく、無事年を越せようである。

なかなか秋らしい陽気にならないと思っていたら、いきなりのように深まり、冬が猛スピードでやって来て、大雪の便りも聞こえてきた。異常気象を言われているけれども、四季の帳尻だけは合わせてくれるようだ。

とはいえ、北風の吹くのが遅く、秋の遅れを取り戻そうとアクセルをいっぱい踏んでいる。

この会報は、編者の知人に毎月送らせてもらっているものであるが、時折、感想や意見をいただく。

有難いことである。

会報にはその都度、紹介しており、次への参考にさせていただきます。

《読者投稿》

私の国府巡り 史跡保護

京都府精華町 今井 直

武蔵国分尼寺跡（東京都国分寺市）は、JR武蔵野線を挟んで武蔵国分寺跡の西に隣接する。尼寺跡はJRの線路際というより、尼寺の東門や築地塀があつた所を高架で、毎日たくさんさんの列車が通過している。今は史跡公園となっている南端に、二つの石碑がある。向かって左側が『史蹟武蔵国分寺址』で、『史蹟天然記念物保存法に依り大正十一年十月 内務大臣指定 大正十二年十一月建設』

右側にある小さめの碑が『史蹟武蔵国分尼寺跡』。『国分寺市教育委員会 昭和四十八年三月建之寄贈東京都杉並区岩永蓮代』と刻まれている。

鉄道の東側の僧寺跡には、もちろん『武蔵国分寺址』の碑が建っている。しかし、尼寺跡にも『武蔵国分寺址』の碑があるのは妙だ。どうやら、僧寺と尼寺が一括で国の史跡に指定されたからだろうだ。

気になるのは碑を寄贈した「岩永蓮代」だが、私は以前にもこの名前を見かけたことがある。播磨国分尼寺跡（兵庫県姫路市）だった。最寄の駅は、JR山陽本線・姫路駅のひとつ大阪寄りの御着（おちやく）で、先ごろの大河ドラマ『軍師官兵衛』に登場した御着城の近くだ。『播磨国分尼寺跡参考地』の碑と並んで、建碑に至った経緯を記した石碑があり、その末尾に「諸国国分二寺跡保存発願者 東京都杉並区岩永蓮代」と書かれていた。

由来記によると、昭和四十年頃、播磨国分寺跡は国の史跡とは名ばかりで、荒廃の危機にさらさ

れていたという。遺跡や文化財は、地震や暴風雨・落雷など自然災害よりも、保存対策の手遅れなど人為的に消滅するほうが遥かに多い。礎石が完全に残る塔跡の整備・定期的な草刈とゴミ掃除・国分寺跡を明示する標識の設置の三点を、姫路市教育委員会に要望することから、岩永蓮代の史跡保護活動が始まった。お役所仕事の世の常で長い歳月がかかったが、関係当局に再三訴え続けた彼女の努力が実り、発掘調査がなされ徐々に保存へ向かうことになった。

播磨国分寺の約五百メートル北に、史跡指定もない民有地だが、古くから尼寺跡と伝わる所があつた。彼女が訪ねると、二個の礎石が居住者宅の庭石として使われていた。さらにすぐ近くでは、ある民家が建築中で上棟したばかりであつた。もしやと思いつき関係者に尋ねると、古瓦がザクザク出てきたと言う。それは花びら模様のヘンな瓦で、海の埋立地へ運び処分したと聞き、彼女は大きなショックを受けた。ヘンな瓦とは、国分尼寺の蓮華文軒瓦のほかに考えられないからだ。

岩永蓮代は、組織に頼らない一人の主婦ながら、文化財保護の大切さを根気強く姫路市に訴えた。尼寺跡の地権者には手紙で遺跡の保存を懇願し、何度も東京から姫路へ出向いて説得を続けた。やがて彼女の熱意に賛同する人々も増え、その人柄に心をうたれた地権者の理解もあつて、昭和四十六年に礎石と敷地の一部が提供され、参考地碑が建てられた。周辺一帯が民有地であるため発掘調査はなかなか進まないが、数々の傍証から尼寺跡であることが確実視されている。

武蔵国分尼寺跡の場合は、行政側と激しいバトルが繰り返された。昭和三十九年に国の史跡で

ある尼寺跡で、無許可の大規模な宅地開発が行われ、すでに尼坊跡と講堂跡が未調査のまま破壊されてしまっていた。岩永は、国分寺市の教育委員会や市長に何度も書状で史跡の保護を訴えたが、なかなか回答がなかった。市の対応としては、整備計画を立案し審議会に諮って予算を組むのに、かなりの時間がかかるだろうが、やっと届いた返事は、「すでに宅地化している地域が多く、財政上の事情もあり、用地買収や整備を充分に進めることは困難」ということだった。

ちょうどその頃、国分僧寺の寺域内に中学校の建設案が浮上し、マスコミを中心に大騒ぎとなった。行政側は、より豊かな市民生活を優先したかったのだろう。国分寺市という市名の由来ともなっている国分二寺跡の保存について、当時の市長から「国分寺跡は有難迷惑な存在だ」と、常軌を逸した発言まで飛び出してしまった。僧尼寺の荒廃が進む一方、行政側の目に余る姿勢に、岩永は「文化財は官民がともに努力して守ろう」と訴え、たくさんの署名を集めた。

そして、一般の人々にも貴重な史跡であることによく認識してもらうため、岩永は私費で『史跡武蔵国分尼寺跡』の碑を建てた。保存運動を始めてすでに十年の歳月が流れていた。武蔵国の国府があった大國魂（おおくにたま）神社（府中市京所）近くの石屋さんが、建碑にあたり実費で協力したという。市当局としては、杉並区の一主婦の迷惑なふるまいに、「国分寺市の名誉と市政の権威にかかわること。碑に名前を入れるのは、売名行為に過ぎない」と、泥沼の争いとなった。しかし碑に名前を刻むのは、建碑者の責任を明示することである。結局は世論に押され、今日では史跡公園として

整備され、市民の学びの場であり憩いの場となっている。本来なら、地方自治体が文化財保護法や条例に基づいて、遺跡の保存を行うべきであるが、行政側の力が及ばないか、また行政が無視してきた問題に、岩永蓮代が光を当てたのだった。

「やもすれば開発の波に吞まれて、結局破壊されてしまう例が多いので、取りあえず推定地とか参考地の標識を立てておくことが、多少の歯止めになるのではないだろうか。こうすれば、一般の人に対しては遺跡認識を少しは高められ、行政側に対しても、早く何とかしなければという刺激になるかもしれませんね」と、彼女は言う。

私は、その後も数々の国分僧尼寺で「岩永蓮代」の碑に出合った。群馬県前橋市で『上野国分尼寺跡参考地』碑。長野県上田市では『史跡信濃国分尼寺 法華滅罪之寺跡』碑。岐阜県垂井町には『美濃国分尼寺跡 此付近 推定地』の石碑が建つ。まだ訪れていないが、陸奥国分寺跡（仙台市）や薩摩国分寺跡（薩摩川内市）にも、彼女が寄贈した碑が建っているらしい。私の国府巡りは現在四十九ヶ所を数えるが、岩永蓮代が保存活動に携わったと知らずに、見学を済ませてしまった国分僧尼寺がたくさんありそうだ。「諸国国分二寺跡保存発願者」としての情熱とその行動力には、ただ敬服するばかりで、機会があればまた岩永蓮代の足跡にふれてみたい。

石岡市の方々には、蛇足で恐縮だが……。岩永蓮代が昭和五十八年春に、常陸国分尼寺に萩と山吹を百五十株ずつ寄贈したことを、私はこの文章を書くまで知らなかった。当時は尼寺跡の東半分が未整備で、金堂・講堂跡の西側遊歩道に沿って植樹されたという。

「国分尼寺としては全国で唯一の特別史跡であるから、一番すばらしい尼寺公園にしたい。四季折々に何度も足を運びたくなるような魅力ある史跡公園に！」が、彼女の熱い想いであった。萩は万葉集に最も多く詠まれた植物であることを、念頭に置いて選んだのだろう。

昨年九月に尼寺跡を訪れたとき、私はそんなエピソードをつゆ知らず、案内板の脇で紅くほころび始めたばかりの萩の花に見とれて、その可憐な風情をカメラにおさめていた。

※参考文献・岩永蓮代著『文化財保護ありのまま』（六興出版・1987年刊）

京都の今井さんは、当会の兼平さんが歴史ボランティアガイドでお知り合いになった方である。全国の国府巡りをされており、その時の紀行文を投稿頂いている。

他国からの風が吹き込んでくれることこそが、このふるさとのことを考える最も大きな力になると編者は考えている。

来年も引き続き、国府巡りを、ご投稿頂けます事、願ってやみません。どうぞよろしくお願いいたします。

養生日記

堀江実穂

人間合格

人間はみな不完全だ。だから失敗もする。

よく「この人は駄目人間だ」と決めつけてしまう人がいる。そう決めつける人も人の良い所を見ることができない駄目人間だ。

誰にも必ず良いところがある。
私は、すべての人が人間合格だと思っている。
人が人を見下すことがある。
また人が人を立派だと見上げることがある。
でもそれらはすべて人間だけの小さな枠の中だけのこと。

人は皆同じ。人は皆兄弟であり姉妹。
命の重さの尺度はない。
人と比較することはしない。
人と比較されることもされたくない。
人は皆「人間合格」だ。

別世界

私は三十代半ばまで、耳の障害を気にすることもなく、統合失調症にかかることなど思いもしないで、普通に車を運転し、仕事をし、三人の子供を育ててきた。

友人や知人に障害者はいなかった。
その頃は私もどちらかという障害者の人たちを一段低く見ており、自分とは違う世界の人と認識していた。

そんな目線で見られなかったのだ。
三十代半ばに自分が統合失調症という病気だとわかった時にはショックで、自殺を考えたりした。
統合失調症と分かってからは、友達になる人がガラッと変わってしまった。

今、私の友人の多くは障害を抱えた人である。
今の私の周りは、ほとんどが障害を持った人たちである。

少し前まで、障害者を偏見の目でしか見られなかった自分が恥ずかしい思いでいっぱいである。

障害は自分の個性と考えられるようになってきた自分に驚きを感じている。
障害を抱えた大勢の人たちと一緒にいると、かつての自分はなんと横並びの没個性の生活だったのだろうかと思えるようになった。

障害者という言葉は、一語であるけれど、障害者たちとの生活では、誰一人同じではない。何よりも障害者同士が比較しあうことがないのだ。

見方を変えて自分の世界を見ると、これほど人間味のあふれた個性の世界、別世界だと思える。

最近、フェイスブックなどに寄せられている記事に、統合失調症を理解しようといったものが多くみられるようになった。その病気がなかなか理解されず、多くの人たちが辛い思いをされているようである。堀江さんが、「こころ」に投稿してくれているようになって一年数か月になる。

あちらの常識はここちらの非常識の蔓延で世界中に争いが絶えない。
現代人の百人に一人が統合失調症と言われるほど、この病気で悩んでいる人が多いのだという。この編者には、これは何に対しても尺度を当てて、上下、優劣等を勝手に図って安心したいというつけが来たのではないかと思っただが…。

《風の吹き・風の嘯き》

先月号まで、ちよつと一言もつ一言と名付けたコーナーであったが何とも面白くない表題だなど思っていたのであったが、今月から「風の吹き風の嘯き」に変更してみた。もともと「ヘーシ調整のた

めに、菅原兄に「コーヒーブレイク」として短文をかいてもらっていたのを、独立した「コーナー」にしたのであった。

もつといいネーミングがあれば、また変更したいと思っています。

戻った手帳

打田昇三

「忘れ物」は親切な人が見つけてくれれば持ち主の許に届くかも知れないが、忘れた場所が悪かったり、見付けた人が横着だったりすると文字通り遺失物になって戻るとは無い。異国では尚更であるが、私は機内に忘れた手帳を、其の日のうちに思いがけず返して貰った経験がある。

カラチ空港から世界四大文明の一つインダス文明の古代都市遺跡として知られたモヘンジョダロ（オリエント学に詳しい三笠宮は「モエンジョダロ説」をとる）に飛んだ時のこと、中型のオランダ製双翼プロペラ機が珍しい飛行機なのできよるきよるして機内に手帳を忘れたのである。

其の日は体調が悪く更に南国の猛暑に負けて食欲も無かったからホテルで準備してくれた弁当も箸がつけられずにいたのだが、現地地知り合った犬の親仔が居たので頼んで食べて貰った。その犬たちは帰りの空港まで見送りに来てくれた。

犬に挨拶して帰りの飛行機に乗り込むと、ニコニコ笑いながら近づいてきた乗務員が何か差出している。見ると私が忘れた手帳である。

偶然と言うか好運と言うか、来た時と同じ飛行機で乗務員も同じだったので、私が機内でメモしたのを見てくれたのである。パキスタンは英国支配の国であったからお礼の言葉も「サンキュー

」で済んだ。単純な感想だが機内乗務員も犬も観光客に対して親切である。ただ、残念なのは印度と戦争をして独立した国であったから当時は至る所に大砲などが展示されていたことである。親切な乗務員と穏やかな犬の親仔と大砲とは、どう並べても一枚の絵にならない。

筑波山おちこち

菅原茂美

筑波山は茨城県つくば市にある堅牢残丘（ネットまる写し）。二峰からなり、西側は男体山（871m）、東側は女体山（877m）。雅称は紫峰。日本百名山・日本百景の一つである。また西の富士山、東の筑波山とも称され、「水郷筑波国定公園」に指定されている。中腹からは特定保護区域に指定され、動植物の捕獲採取及び焚火は禁じられている。

山頂には筑波山神社（本殿）があり中腹には拝殿（坂東33箇所²⁵番札所）がある。筑波山はガマの油売り口上で知られ、山中には奇岩名石が多数、多くの伝説があり、山そのものが「神域」として崇められる。開山以来「結界（仏道修行の障害となる者の入ることを許さない）」が張られ、山の万物が「神体」とされる。夜間は男体女体の神々が、御幸原に出現するため、二人の遊樂を妨げてはならず、入山してはならないとされた。

旧日本軍の「真珠湾攻撃実施せよ」の隠語は「ニイタカヤマノボレ」であるが「直ちに帰投せよ」は「ツクバヤマハレ（筑波山晴れ）」であった。山名の由来は、「常陸風土記」によれば、崇神天皇の時代、国造に任命された采女（うねめ）氏の友属（ともがら）の「筑算命（つくはのみこと）」が、わが名

を国に付けて後世に伝えたいと云い、筑波と改称したとされるが、この時代の記述は、史実とは考えにくいゆえ、学術的考証は①縄文時代、筑波山周辺には海の波が打ち寄せ、筑波山は波を防ぐ堤防の役割を果たしていたので、築坡（つきば、後に筑波になった。②アイヌ語の *teppa* とがった頭にちなむと考えられる。なお筑波山は、山の形から火山と誤解されがちだが、火山ではなく、隆起した深成岩（花崗岩）が風雨に削られて形成されたものである。

異邦人

打田昇三

ノーベル賞作家の作品を真似たような題名で申し訳ないが是は異国で道に迷った体験談である。イラン・イラク戦争が終わった直後に世界で二番目、日本では最初のイラン国内ツアーがあった。その頃に「古代オリエント史」を齧っていたので参加し、年末にイラン航空でテヘランへ飛んだ。厳冬でも暖房が無い北京空港経由で深夜にテヘランへ着きホテルで昼まで寝てからイランを回る十日間のバスの旅が始まったのだが、見た目は立派なバスもドアが開かず乗降は窓を使う。その車で毒蛇が居るといふ草原を走り抜ける。ドアが開かないのは安全対策だと納得はしたが不便である。クルド系民族の街から戻って来て、イラン西北部の中心都市ハマダンに宿泊した。此の街はイラン最初の王朝を築いたメディアアの首都であった。七重の城壁で囲まれた黄金の城が在ったという伝説が残るのだが、現地のガイドが連れて行ってくれた遺跡には、それらしきものが無い。

ホテルは遺跡から近かったのでバスの中から曲った交差点を覚えていて、明日の食事時間までにもう一度、遺跡を見ようと勝手に決めた。翌朝、暗い中にホテルを抜け出して遺跡を回り、戻って来る途中で道を一本、間違えた。自分が何処に居るのかわからないから戻るも出来ない。途方にくれた時に、新聞販売店が見つかった。日本と同じく配達のおじさんが焚き火にあたって居る。道を聞くにもペルシア語が分からない。そこで「○○ホテル！」とだけ大声で叫んだ。おじさんは困って店内に居た店主に何か言った。多分、店主は「連れて行ってやれ！」と言ったようで、おじさんが何か言いながら歩き出した。

ペルシア語と日本語と、双方が適当に発言しながら早朝のハマダン市内を歩くこと約十分、宿泊していたホテルの看板が見えた時には、唯一、憶えたペルシア語で「モタシヤケラム（有難う）」を連発しながら、両替していたイランの紙幣でそれなりのお礼をした。ホテルに着いたのが朝食時間の前であったから、私が抜け出して道に迷ったことは誰にも知られずに済んだ。

南京大虐殺事件が記憶遺産に

菅原茂美

中国は、日本の中止要請を聞かず、世界記憶遺産に「南京大虐殺事件資料」を申請し、ユネスコはそれを登録した。そもそも国際機関を政治利用する事はルール違反である。ユネスコも全経費の1割（国連分担比率に応じ37億円）を日本に課しているが、一方的要請を受け入れるなど著しく公平さを欠く。（分担比率は1位米国22%、2位日本10%。中国は5

位で5%。米国は、ユネスコがパレスチナ加盟を認めためたため、現在、分担金支払いを停止している。日本も支払中止を検討中。

尤も国連事務総長は、韓国出身で、先に中国の抗日戦勝70年記念軍事パレードにノコノコ出席するなど、公平さを著しく欠く非常識さである。

「南京大虐殺事件」は、日中戦争中1937年、中華民国首都南京で、日本軍が中国軍の投降兵・捕虜・便衣兵（民間人偽装兵士）・一般市民を大量に虐殺し、合わせて放火略奪などした事件とされるが、真実は不明である。虐殺人数を中国は30万人以上と言っているが、日本がいう数万人とあまりにも人数が隔たり過ぎている。

南京大虐殺事件の虚報が広まるきっかけは、日本の新聞記者（H）の連載記事との事。それに尾ヒレが付き拡大報道がなされるようになったとか。実は中国で2010年ノーベル平和賞に劉曉波氏が決まった際、犯罪人を表彰するノーベル賞など、ろくなものではないとして、「孔子平和賞」を設け、世界の失笑を買った。15年度孔子平和賞は、ジンバブエの保護領化を狙い、ムガベ大統領（91）に決定。この人物は世界最悪の独裁者にランクされている。16年度孔子賞は、日本を売り、南京事件ユネスコ登録に貢献した日本のH記者とか…!?

【特別企画】

打田昇三の私本・平家物語

巻第三（四・二）

法皇被流（ほうおうながされ）のこと

是までに平家物語の巻二には「座主流」「大納言流罪」「卒都婆流」があり、巻三に「大臣流罪」があった。当時は大洪水が頻繁にあったから皆さんが激流に流されて行くのでは無く、刑罰に依り流罪にされる者が居たのである。当時は刑罰の種類が「大寶律令」に決められた「笞（ち）むち打ち」「杖（じょう）杖で打つ」「徒（つ）近く流罪」「流（る）遠方に流罪」「死（し）死罪」の五種類しか無かったので、重罪でも死刑とまではいかない者は簡単に流されたのである。笞打ちも杖打ちも、本気で叩かれたならば死ぬこともあったろうから流罪のほうが楽かも知れないが流された先での暮らしが保障されていた訳では無い。源頼朝の場合は関東地方に源氏ゆかりの武士団が居て、衣食住の面倒を見て貰ったから何十年も生きて居られたのである。誰も頼れない島流しの苦勞は巻二「大納言死去」などで語られている。

今回は、日本という国家の頂点に君臨する朝廷のボスである後白河法皇が、家臣の平清盛に流されるという珍しい事件ではあるが、場所的に見れば京都市内の東山区（三十三間堂の近く）から少し大阪寄りの鳥羽に遷されただけのことであるから健康維持のためにハイキングに行ったと思えばどうと言う事は無い。しかし権力と権威と格式の頂点にいた筈の法皇が、無官の爺さんに流されるのであるから天皇制を金科玉条として国家を支えて来た連中には驚天動地の出来事である。

治承三年（一一七九）十一月二十日、後白河法皇が

居た法住寺殿には数え切れないほどの平家軍勢が押し寄せて来た。其の数は二、三万騎も有るかと思われ、四方は軍兵によって完全に囲まれて犬や猫でも

逃げ出る隙間は無い。「平治の乱」で藤原信頼と源義朝が後白河法皇（当時は上皇の三条殿を襲って火を掛けたように、此の度も焼き殺されるのであろう…）と言う様な噂も広がっていたから、地位の有る女房も下働きの少女たちも脱出しようと慌てていた。当時の女性たちが屋外に出る場合には笠か衣類で頭部を覆うのが常識のだが緊急事態に舞い上がって只、慌てているばかりであった。勿論、法皇も驚くことしか出来ない。

其の中に清盛の後継者である平宗盛が悠々と牛車でやってきて「早く、この車にお乗り下さい」と急ぎたてた。気の所為か牛も機嫌の悪そうな顔をしている。法皇は咎めるように「是は何事であるか！自分に罪が有ると思われないのに、成親や俊寛のように遠方の国、遙かな島にでも幽閉するつもりなのか：（私が天皇の政務に気を使っているのは）未だ年齢が若いから、心配をしているだけである（当時、高倉天皇は十九歳）それがイケナイと言うのであれば、是からは止めよう」と、苦し紛れに言われた。

宗盛は、少し慌てたように「その様なことでは御座いませぬ。世の中が何となく騒がしいので、暫くの間でも法皇様には鳥羽殿に御移り願うように、と父の入道が申しているのです」と下手な嘘を更に嘘っぽく申し上げた。法皇も一筋縄ではないかない人物であるから「それならば宗盛も供をするように！」と言った。予定した筋書きにない展開になって宗盛は慌てた。法皇に言われて同行したりすれば清盛に怒られることは目に見えることなので返事も出来ずにモジモジしていた。

法皇は「ああ、其れに付けても宗盛は兄の内府（内大臣であった重盛）には遥かに劣る人物であるな！」と、巻二「教訓状」の場面で清盛を諷めた重盛の忠節を

思い出していた。もし、重盛が居なかったならば一年前に今の様な立場に立たされていただろう。自分の身に替えて重盛が清盛を制してくれたからこそ法皇は今日まで無事で居られたのである。今は平家に清盛の暴走を留める者も居ない。是からはどうなるのであろう…と涙を流されたのである。余計な事を言えば、それが分かって居ながら清盛を刺激し続ける法皇のほうも懲りない要注意人物ではある。

法皇が泣こうと喚こうと清盛が「法皇被流」を決めてしまったのであるからどうにもならない。宗盛に導かれて法皇は車寄せに向かった。気の利いた部下が身の回りの品物を牛車に乗せてくれるものと期待していたのだが、坊さんの外出のようにお経の箱だけが積まれていて手荷物が積まれた様子も無い。さらに法皇の供をする公卿も、見送りをする家臣の姿も見当たらない。ただ、北面と言って法皇御所を護る武士の、それも身分の低い法師姿の者が一人だけ付いてくるような気配であり、此の者が腰に短刀を差し長刀を持っている。

牛車の後部座席には後白河法皇の乳母で、平治の乱に殺害された藤原通憲(信西)の妻ある紀伊二位だけが付き添っていた。ただし、別な女房が付き添ったとする説もある。いずれにしても、法皇の家来は法師と女房一人だけで、後は平家の武士が回りを囲んでいるから生きた心地はしない。

行列と言っても大部分は警備の平家軍勢であるが七条大路を西へ進み、朱雀大路から南下して鳥羽へ向かうので、その途中には群衆が待ち構えていた。何しろ法皇が流される!という前代未聞の出来事を一目見ようと都中の人々が繰り出した。普段は権威の塊で近づくことも出来ない法皇が罪人として送られるのであるから、是ほど珍しい出来事はない。「涙

を流し、袖を絞らぬは無かりけり…」と原本に書いてあるが、サービスであろう。半月ほど前に大地震があり庶民は困窮していたから上流階級の権力争いは見世物に過ぎない。考えて見れば地震騒動も、この様な珍事が起きる前兆であったのかと人々は噂をしていた。

鳥羽殿に入られた、と言うか抑留された後白河法皇は、近臣の大膳大夫平信成が平家の武士に見咎められずに潜り込んでいたのを呼び寄せて次のように言われた。「…どうも、此の様子では清盛は今夜にでも私を暗殺するような気配である。そうならば、殺される前に行水をして身を清めたいと思うのだが、どうしたら良いであろうか?」と言われた。それだけでなく、朝から法皇が抑留されるという大事件で気持ちが悪転している信成は呆然とした俣の状態であったから、名案が浮かぶ道理が無いのだが、普段は近くから声を掛けて貰えない身分なのに「風呂に入りたい!」と頼まれたので、金鶏勲章でも貰ったように感激した。

難しい宮中行事は苦手だが風呂を沸かすとか掃除をするなどの庶民的作業は得意である。早速、武士の正装である狩衣に襷(たすき)を掛け、風呂桶に水を汲み入れてから、垣根や床板、見え無い部分の柱まで、どうせ自分の屋敷では無いから燃えそうな材木を壊して来て燃料にし、忽ちのうちに風呂を沸かして法皇に勧めた。

その頃に、先に平家屋敷へ行った静憲法印が入道相国の居る西八条邸に寄って「法皇が鳥羽へ移されたというのに、御前にお供が一人も居ないと聞いて、余りに嘆かわしく思います。何の支障も無いので此の静憲を御側に置かせて下さい…」と頼んだ。清盛も「御坊ならば誤りを犯すようなことは無いである

うから…」と言って許してくれたのだが、その頃、法皇は信成が沸かした風呂に入って、ゆっくりとしていたのを二人は知らない。

静憲法印が鳥羽殿に来て車を降り門内に入ると法皇は丁度、お経を読んでいた。原本には読経の声がある。淋しく聞こえた、と書いてあるが湯上りであればススキリとしていた筈である。法印の姿を見た法皇は、思わず涙ぐんで涙がハラハラと経文の上にかかるのが哀れである。法印は余りの悲しさに衣服の袖を顔に押し当てて法皇の御前に進んだ。近くに控えているのは先に述べた尼さんだけである。その尼さんが涙ながらに「法印殿、御前(法皇)は法住寺殿で昨日の朝食を召し上がっただけで、夕べも今朝も食事を摂られて居られない(食事を差し上げることが出来ない)のです。その上にご心労の余り、長い夜も御休みになることが出来ない。この様な状態では法皇のお命まで危うく思えてなりません…」と嘆いた。

静憲法印も尼さんの訴えを聞いて何とかしたいのは山々であるが、平清盛に嘆願して法皇の様子を見に来るのさえ精一杯であるから、物質的に何か出来る訳では無い。「何事も(世の中の事は)限りの有ることですから、平家が繁盛し経済的にも恵まれ栄えて二十余年が経ち、悪行が限度を越えて今や滅亡に向かっています。天照大神や八幡宮の神々がどうして平家の悪業をお許しになるでしょうか、取り分けて朝廷が深く頼む日吉山王七社の神仏が法華経を誦する君(法皇)をお護り下さらない筈がありません。近い中に政権は平家から朝廷に移って、凶徒たちは水の泡のように消えうせて行くことでしょう」と強がりと言った。

尼さんが食べ物の心配をしているのに、神仏の御利益を述べても何の役にも立たないとは思っているのだが、

静憲さんの言葉に騙されて、その場に居た者たちは少し慰められた思いがした。

一方で、高倉天皇は関白達が流罪にされ多くの臣下が処罰されたことを嘆いておられたのであるが、その上に今度は父親の後白河法皇が義父の清盛によって鳥羽殿に押し込められた、と聞いて是も心配の余り食事も喉を通らぬ有り様であった。此方のほうは食事が与えられただけ、増しだ！などとは言っていられない。「御病氣」と称されて、清涼殿内の寝所に籠る日々が多くなつた。皇后の宮（清盛の娘・徳子、後の建礼門院）を始めとして奉仕する女房たちも、どうして良いか分からずウロウロするばかりであった。

其れで無くても天皇が行う神事は多いのだが後白河法皇の鳥羽殿幽閉後は其れが多くなり、高倉天皇は毎夜のように清涼殿の石灰壇（伊勢神宮遥拝用の壇）に上がられお祈りをされていた。是は只々、父親（法皇）の無事を祈られる目的のお祈りであった。

さて、原本は次に「…二条院は賢王にて渡らせ給しか共、天子に父母なしとて、常は法皇の仰せをも申す返させましましける故にや、継体の君にてもましまさず、されば御譲を受けさせ給ひたりし六条院も、安元二年七月十四日、御年十三にて崩御なりぬ。

あさましかりし御事也」で此の章段を終わっているから、後白河法皇の鳥羽殿幽閉を案ずる孝行息子の高倉天皇が何処かへ消えてしまうのだが、是は平家物語特有の「独り善がり」手法であり、高倉天皇の長兄で後白河天皇の第一皇子であった第七十八代・二条天皇（巻第一〇代后）参照が父帝と仲が悪かったことを、高倉天皇の父帝思いと対比しているのである。

後白河法皇は、父親の鳥羽天皇から「天皇の器（うつわ）に非ず」と言われ、公卿には「不徳の君」と軽

蔑されながら平清盛に抵抗し、二条、六条、高倉、安徳、後鳥羽の五代に亘る天皇時代に院政を行い、後に源頼朝を翻弄して武士が世に出る時代の影の立役者として活躍したのである。

「天皇の器」がどういう基準か知らないが何も出来ない馬鹿公家より「やる気」はあつた？その後白河法皇が、今は幽閉生活を余儀なくされているのである。誰でも褒められるのは難しい。

城南之離宮（せいなんのりきゅう）のこと

平家物語は此の章段を以て巻三が終り、巻四からは年代的に治承四年（一一八〇）に入る。治承四年に起きた最大の事件は「源頼朝の挙兵」であるから、此の章段は権勢を誇っていた平家の倒産寸前の話になる。但し平家物語の作者も少し清盛に遠慮をしたと見えて、お得意の古代中国や仏教の話でお茶を濁しているから、平家とは何の関係も無く読んでも何の感慨も湧かない。

何よりも題名の「城南の離宮」とは、後白河法皇が平清盛に押し込められた鳥羽殿の別名であるらしいから、此の章段が倒産した店の残り少ないバーゲンのようにつまらない作品になっている。尤も専門の先生方の御批評だと原文の最後に「…年去り年来たつて治承も四年になりけり」とあるのが「暗雲をはらみつつ明ける動乱の世の訪れを暗示する」言葉らしいので「つまらない」と思っても最後まで読んで頂きたい。その埋め合わせでは無いが巻四になると長い期間、地下に潜んでいた源氏系の武士たちが、春先の池のオタマジャクシのように現れて来て平清盛を怒らせる。

さて「百行」と言われる人間の行動の中で先ず其の基本とされるのが「孝行」であり、中国の「孝教」という書の中にも「明王（賢明な王）は孝を以て天下を治めると言へり。されば唐堯（とうぎょう）司馬遷が書いた史記の第一巻に出てくる先史時代の聖王の一人は老い衰えた母親を尊敬し、虞舜（ぐしゅん）同じく史記にある古代の名君は頑固な父親に従つた、と有る」

其れに倣つて高倉天皇が古代から伝わる賢者たちの行いを手本に（幽閉されてしまった後白河法皇に対して）出来る孝養を尽くそうと思われた御心の中は哀れにも尊いことである。

その頃、内裏（天皇）から鳥羽殿（後白河法皇）に宛てて一通の手紙が送られてきた。用心深い清盛も手紙の検閲までは気が付かなかつたようで、天皇の親書は無事に後白河法皇に渡つた。それには次のような事が書かれていた。「この様な（異常な事態には）私が天皇の位に居ても何もする事が出来ません。かつて寛平時代に宇多天皇（第五十九代）は出家をされて諸寺霊山を回られました。花山天皇（第六十五代）も東山で仏門に入られました。今は其の例に倣つて宮中を去り、世を逃れて山野を彷徨（さまよ）い歩く行者になりたいと思ひます…」

現代には辞めて貰つた方が良い政治家などが幾らでもいるが、当代の天皇が辞めたい！と言うのは国家の大事であるから法皇も驚いて次のような返事を出した。「何と言うことを仰せられますか。貴方が皇位に付いて居られればこそ、私は何が起きようとも安心なのです。もし出家などされたならば、私は何を頼りに此の世を生きれば良いのですか！この老人が悲しむようなことを、二度と仰せになりませんよ！」天皇は、この返書を顔に押し当てて暫くは涙にくれておられた。

余計なことだが、高倉天皇に少し勘違いがあるらしいので説明して置くと、宇多天皇は菅原道真などの有能な臣を登用して立派な政治を心掛けたけれども、頭も関白の藤原基経などがイヤガラセをしたので、頭に来て退位を決意されたのである。また、花山天皇は父親の冷泉天皇が怨霊に祟られていたから、その影響で「自分もオカシイ」と自覚して退位されたので立派な理由がある。

諺に「君(天子)は船、臣は水、水良く船を浮かべ、水また船を覆す。臣良く君を保ち、臣また君を覆す」とあるが、保元・平治の頃は、入道相国が良く君を保ち奉っていたけれども、安元・治承の頃(一二七五～一二七九)の今は、逆に(平家一門が)朝廷をないがしろにしている。「貞観政要」と言う書の文にも違わず大宮大相国と呼ばれた藤原伊通、三条内大臣こと藤原公教、葉室大納言こと藤原光頼或いは中山中納言こと藤原頭時(も既に亡くなっておられる。古い人と言えば参議・藤原成頼、同じく平親範ぐらゐしか居ない。是らの人々も…この様な時代(平家がはびこる時代)に公卿として朝廷に仕え例えは出世して大納言・中納言などになつても其れが何になるか?と、悲観的な思いに駆られて家を出、世間を逃れてしまつてゐる。民部卿(戸籍、租税、農地、道路などを管理する大臣)兼参議の平親範は、職務途中で大原に出家し、修理大夫(内裏修築官庁の長)兼参議の藤原成頼は高野山に隠棲して是も僧籍に身を置き、後世の菩提に専念してゐる。

その昔、中国では秦の国の暴政を避けて四人の学者が商洛山(長安の南)に隠棲し、また堯帝から天下を譲ろうと言われた賢人の許由が、耳の汚れる話を聞いた、として河南省の潁川(えいせん)で耳を洗つた、と伝えられる。此の先人たちは、広く書を読み、

知識が豊で、心も広かつた為に乱れた世に嫌気がさして世を捨てたのであろう。

高野山に登つていた藤原成頼は後白河法皇幽閉の事を聞いて「心が重くなるような嫌な話を聞いてしまった。この様に出家した身には聞くだけで済んだけれども、もし様々な事件を見てしまつたならば、どの様にいたわしく思つたことであろうか：保元・平治の乱が起きた時には浅ましい時代になつた!と思つていたのだが、世も末になつて(法皇が抑留される)という今度の事件も聞いてしまつた。此の後もどの様な嫌な事件が起きるかも知れない。それを避ける為には雲を分けても登り、山を隔てても奥深くに入る他は有るまい」と嘆いた。心有る人が安心して住めるような場所が無くなつてきていたのである。

治承三年十一月二十三日、鳥羽天皇の第七皇子で天台座主に据えられていた覚快法親王が、しきりに辞退するので辞意を認められ、前の座主であつた明雲大僧正が再び座主に戻られた。巻第二の「座主流」に後白河法皇に睨まれた人物である。

原本に「入道相国はかく散々にし散らかされたれ共…と有るが其の内容は是までに至つた大臣流罪、法皇被流など全てを評してゐるのであろう。清盛の娘・徳子は高倉天皇の中宮で有り、当時の関白は娘婿の藤原基通であるから、清盛も安心して「政務は天皇の御意向でなさるる様に!」と言つて福原(神戸)の別邸に帰つて行つた。

前右大将の宗盛が、清盛に代わつて宮中に参内し高倉天皇に其の事を申し上げると、安徳天皇の誕生に依り自分の立場が微妙なことを察してゐる高倉天皇は「法皇が私に譲られた天下であるならば自分の考えで政治を行うけれども、そうでは無くて法皇も鳥羽に居られる状態であるから、此処は平家が選ん

だ摂政関白などと相談して宗盛が好きになように取り計らえば良いであろう」と皮肉たつぷりに言つて、平家にボールを返した。程なく高倉天皇は平家により安徳天皇への譲位を迫られることになるから、此の回答は正しかった。

平清盛に依つて手足を挽(も)がれたような状態の後白河法皇は「城南の離宮」と名前は変わつても設備は格段に下がつた鳥羽の離宮で冬の半ばを過ごしたのである。付近を通り抜ける風は音も激しく寒々と人の気配も無い庭には冬の月が光だけを惜しげもなく投げかけ、庭に積もる雪も誰に踏まれるでも無く凍てついている。池には水柱(つらら)が重なり、秋に群れていた鳥も何処かへ去つてしまつた。近くに在る大寺(勝光明院)の鐘の声も、唐時代の詩人・白居易(白居易)が詩に詠んだ遺愛寺の鐘を聞くように響き、西山の雪の色も中国古代の詩に詠まれた情景を思い起こすものではあるが、何しろ住んでゐる人間が少ないから全てが寒々としてゐる。

都に在れば法皇の御座所であるから尋ねて来る者も多く、常に門前には牛車や騎馬が連なつてゐたのであるが、今は警備の武士たちが警戒してゐるだけである。法皇は「あの警備の者たちも前世の如何なる因縁で、此処に勤務してゐるのであろうか…」などと仰せられる。不自由な暮らしてゐるから、何事に付けても御心を悩まされることばかりであり、華やかであつた時代の諸所への御遊覧や社寺への御参詣などを思い出されては、昔を懐かしむ涙のうちに日々が過ぎて行き、年去り年来たつて治承も四年になつたのである。

「平家物語」巻三は以上をもつて終り、巻四は予想通りではあるが平清盛の圧力に依つて高倉天皇が、

安徳天皇への譲位を強要される。同時に平家に対する抵抗運動が各地に起こってくる。巻四でその中心となる人物は、源氏の中でただ一人屈辱に耐えて生き残っていた清和源氏の嫡流・源三位頼政であり、此の人は足柄山の金太郎らを率いて希代の盗賊・大江山の酒吞童子を退治した源頼光から五代目の子孫になる。

巻三に戻って、最後が「治承も四年になりけり」で終わっている。平氏に関わる治承年間の重要事項を列記しておく。次のようになる。

治承元年、京都大火災、天台座主明雲の流罪、

藤原成経らの陰謀発覚、関係者処断

治承二年、中宮徳子・安産祈願のため成経ら赦免

(後寛は許されず)、安徳天皇生誕

治承三年、平重盛の熊野詣、延暦寺僧兵討伐、

重盛病死、大地震、関白以下罷免、後

白河法皇の院政停止(幽閉)など

巻四は治承四年元旦から始まるのだが、三が日の間、法皇が幽閉されている鳥羽殿には誰も来ない…予想されたことながら、どうなるのか。

(巻第三・終)

編集事務局 〒315・0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>

(新刊良書紹介)

今だからこそ世に問う

戦後70年を清算する市民主体の実践的安全保障論

反戦・平和を願う善国の市民におくる待望の書

丸腰、国防論

憲法9条の理念、今ここに！

「丸腰」とは、武士にとって命ともいべき刀を腰に差していないという状態を言いますが、それを国にあればめれば軍備をもたないことになりましょう。独立国家である日本にあって、その「丸腰」と「国防」を結びつけるとなると、これは相反する2つのことを1つにしたようで、あきらかに妄想と受け取られても仕方がありません。(略)しかしながらよく目を凝らして見ると、政治家やその道の識者が論じる国防論はたいていの場合、生活者は生命と財産を守られる対象として後方に置かれていて、国家が前面に、つまり「国家の存立」の問題として論じられているように思われます。生活者が国防の主体としての国防論にはほとんどお目にかかることはありません。そこで、「王様は裸だ！」と叫んだ子どもの澄んだ目に、仕入れ値と売値の間で頭を悩ませている店主の商品に対するこだわり意識、消費税や食の安全に敏感な主婦の生活感覚……そんな等身大の目線でこの国防という大それた課題に取り組んだらどうという結論が導き出されるか。(本書「はじめに」より)

本書(頒価)1500円(税込み)をご希望の方は、ゆう出版

Fax 0299(42)2240

Eメール gohdatora@yahoo.co.jp

までご連絡ください。